

加納城(国史跡)(岐阜市加納丸の内)

加納城（かのうじょう）は、岐阜県岐阜市加納丸の内にあった、加納藩の藩庁となった平城である。城跡は加納城跡（かのうじょうあと）として国の史跡に指定されている。

加納城は2重の堀をもつ、南北に細長い城（南北約600メートル、東西約300メートル）であり、城の大手門は北側にあり、中山道に面し、大手門前で屈曲する構成となっていた。内堀は本丸を取り囲む形で配置され、外堀は、荒田川（東側）、清水川（北側）、長刀堀（西側：現在の加納長刀堀（かのうなぎなたぼり））、加納中学校付近に南の外堀があった。

本丸は方形を成し、そこから外柵形が突出している。これは初期徳川系城郭の特徴とされており、「加納城型」とも呼ばれている。主な曲輪として本丸とその西に二ノ丸、北に厩曲輪・三ノ丸、南に大藪曲輪がある。

本丸に天守台はあったが天守は建てられず、代わりに二ノ丸に御三階櫓が建てられていた。当初は天守の建設が予定されていたが、名古屋城に天守が建設された為に必要が消えて造られなかったという。この城の石垣には加工するにはあまり適さないチャートが使われている。

城下町・加納は、東に配置された武家地と、北側にある中山道53番目の宿場である加納宿。

前期加納城

文安2年（1445年）に川手城の備えのため、土岐氏の家宰の斎藤利永によって沓井城として築城された。船田合戦では斎藤妙純の居城となっていた。しかし、天文7年（1538年）にはすでに廃城となっている。

後期加納城

関ヶ原合戦の結果、それまで岐阜城を本拠地にしていた織田秀信（信長の孫息子）が追放され、慶長6年（1601年）に岐阜城は破却された。そして、都市名は関ヶ原合戦前の「岐阜」から「加納」に改名され、岐阜城の代わりとして翌1602年7月1日から加納城が築城され、9月に徳川家康の義理の息子である奥平氏が入城した時には本丸・二ノ丸は完成していたようである。縄張は徳川家康自身が行ったとされ、普請奉行は本多忠勝とし近隣の大名を動員した。いわゆる天下普請である。建材は主に岐阜城のものが用いられ、岐阜城天守を二ノ丸御三階櫓として利用したと伝えられる。加納城は加納藩の藩主の居城となり、慶長7年（1603年）に奥平信昌が入った後、奥平氏の居城となった。

寛永9年（1632年）に奥平忠隆が死去、嫡子がいないために改易されると従兄弟の大久保忠職が入城、一時的に城主となる。その後の寛永16年（1639年）に戸田光重が入城、3代にわたり城主を務めるが移封され、宝永8年（1711年）に安藤信友の居城となった。さらに時代が下って宝暦5年（1755年）に永井信陳が加納藩主となり、明治維新に至るまで永井氏の居城となった。

Wikipediaによる



